

# いま、仏教ができること

——グループホームの視点から——

釈 徹 宗

今、日本仏教が大きく変わろうとしている、変節期を迎えている、そう感じているのは私だけではないでしょう。いや、もう、変わらざるを得ない状況と言ったほうがいいかもしれません。というのは、これまで仏教寺院が基盤としていた檀家制度・葬儀・法要といった形態が崩れたり変化したりしていますからね。

そして、それに呼応するかのように、いろいろとユニークな寺院や僧侶や仏教徒が同時多発的に登場してきている気がしませんか？ しかもその人たちが、宗派を超えてつながり出している。今日ここへ来てくださっているみなさんの多くは、仏教について研究されているかと思いますが、ぜひ各地にフィールドワークしてみてください。きっと「仏教ってこんなにおもしろいのか」と実感されるに違いありません。まさに、人間が生きていく上でどうしようもない苦悩をいかに引き受けて生き抜くか、いかに死にきるか、という人類の智慧の結晶だと実感するのではないのでしょうか。

とにかく、今、日本仏教はとてもおもしろい時期を迎えていると思います。今日は、いくつかの事例をご紹介します。みなさんが「現代社会と仏教」を考える上でのヒントにさせていただきたいところなのですが、時間も限られておりま

すので、私が運営に関わっている「認知症高齢者のグループホーム」を中心にお話を進めます。

### ■それぞれの特性を考える

その前に少し應典院というお寺のお話をしますね。もう、かなり有名ですので、ご存知の方も多いかもれません。現在の新しい日本仏教ムーブメントの先駆者のひとりである秋田光彦さんが住職です。

應典院は、大阪市天王寺区にある浄土宗のお寺ですが、葬儀も法要もせず、お坊さんでない人も一緒になって合議制で運営されています。さまざまな社会活動や文化活動と連携し、都市のコネクターというか、アジールというか、そんな場になっているんですよ。すごいでしょ。実にエキサイティングです。

その應典院の横には大きな墓地があります。應典院の本寺である大蓮寺の墓地です。その一角を使って、「自然」という、芝生を張った小さな墓地がつくられています。

現在、「お墓を建てても、後の面倒を見てくれる人がいない」、あるいは「子供にお墓の面倒をみるというような責任を負わせたくない」という人は数多くいます。また、都市部でお墓を購入することはとても困難です。安価な公設の墓地はなかなか抽選に当たりません。近郊でお墓を買うのはとても高価。お墓って、けっこうやっかいな問題です。そういう人たちの為に、「自然」がつくられました。「自然」とは、ネイチャーの意味ではなく、すべてはあるがまま存在するといった感じの日本語です。

この「自然」は、生前個人墓です。自分自身で自らのお墓を購入するという形態です。墓石は、芝生の上に、好きなように置きます。これくらい小さな墓石だから、少ないスペースでたくさんの方のお墓を建てることができます。お骨は、芝生の後ろにある（菩提樹をイメージした）ガラス仕切りの向こうに納めます。このような形態なので、大都市の中なのにとっても安価に購入できます（収入は造成費用をペイした後、社会活動に使われます）。

平安時代に、「二十五三昧会」という看取りコミュニティと呼んでもいいような集団がありました。『往生要集』を著した源信が中心になってできたホスピス集団です。二十五人の仲間が集まって、互いにそれぞれの病い・臨終を看取るわけです。彼らは、心身のケアの手法や、「臨終行儀」という手順まで決めていたようです。念仏して浄土へ往生する同じ仏道を歩む者たちが集まっていたのですから、さぞや見事な「臨終の場」「臨終の関係性」が成立していたに違いありません。そう、「同じ物語を共有する」ことは、これからの考察において重要なポイントとなります。

あのね、私から見ると、この「自然」という生前個人墓は、ちよつと「二十五三昧会」に似ている気がするんですよ。なにしろ、生きている間に、自分で自分の墓石を置くのです。おそらく、何か「帰る場所」を決めるような心持ちでしょう。「自然」を帰る場と決めた人たちは、みんなできればしばしば集まっては、懇親会を開き、一緒に旅行して、そしてお彼岸とかお盆にはみんなでお参りをされています。血縁も地縁もない人たちが、お墓を機縁としてつながり始めるのです。まさに「お墓コミュニティ」……。しかも死者も含めたコミュニティです。みなさん、仲がいいですよ。私もお盆の法話に行つたことがあります、とても暖かくて何とも言えない雰囲気がありました。

中には、「あの、私たち、すっかり仲良しになったので、お墓をくつつけてもいいでしょうか?」といったことも起こるそうです。もちろん、OK。あるいは、「私たちのお墓、もう少し間を開けてください」というご夫婦がいたりしてね。おもしろい共同体ですよ。

「自然」の仲間が亡くなつたりすると、やはりとても悲しく寂しい。真摯にお参りに来られます。お墓を通じてできた関係の人々が、これからもずっと勤行し続けていくわけです。

さて、この應典院には年間三万人以上の若者がやってきました。のべて計算すれば、一日百人近く。すごいですよ。障害者問題をやっている人たち、在宅ホスピスをやろうとしている人たち、不登校問題、ニート問題、劇団やアート、とにかくいろいろな人たちが集まってきました。「そこへ行けば、何か出会いがある」、そんな感じですよ。そして、應典院

の活動は、都市部の真ん中にあるという立地事情とも大きな関係があります。

お寺って、一ヶ寺一ヶ寺事情が違ふんですよね。同じ宗派でも、全く異なったりする。例えば、私が住職をしております如来寺は、えらい田舎にあります。そして、お寺の周りは全部檀家さんです。いわゆる「ムラ」って感じ。

もし如来寺で、應典院のような活動をマネしても、うまくいかないと思います。逆に應典院で、これからお話するような如来寺の手法を使ってもダメなんだろうと思います。そういう意味では、それぞれお寺の特性や各個人の特性をよく知ることが大切です。それが、今日のテーマである「いま、仏教ができること」へとつながっていきます。

■ いつのまにか認知症高齢者と関わることに

私は、NPO法人を立ち上げて、グループホーム「むつみ庵」や、ケアプランセンター「かんのん」などの活動をしています。

もともと社会活動への強い志があったわけでも、高齢者介護に関心があったわけでもありません。ちょっとしたきっかけで、いつのまにか巻き込まれてしまいました。最初は、如来寺のウラにあるお宅が空き家になったことがきっかけでした。

ウラのお宅には、植木屋さんのお爺ちゃんとお婆ちゃんが住んでました。それで、お婆ちゃんが往生され、次にお爺ちゃんが往生されました。子供さんが三人いてはるんですけれども、すでにそれぞれ別の都市で暮らしてはりますので、誰も帰ってくる予定もない。それで、お寺のウラだし、何か社会の役に立つことに使おう、そんな話になりました。

いろいろとみんなで相談していると、「グループホームというのがあらしい。最新の市民参加型福祉の形態らしい。北欧にはたくさんあるけど、まだ日本では少ないそうだ」などといったことを知りました。そのときまで、グル

ープホームという言葉も知らなかったんですよ。そして、そのグループホームというのは、「施設」と「在宅」の中間的存在だということを聞いて、「おお、それなら、ウラのお宅をそのまま使って、認知症高齢者の方に暮らしてもらえばいいのではないか」「このあたりは田舎で、いい雰囲気だし。檀家さんたちにも協力してもらえばシロウトでもなんとかなるんじゃないか」ということになりました。

ウラの家は、築六十年くらいの古民家なんですよ。瓦屋根で、玄関を入ったらなんと土間。大きい縁側があつて、梁も剥き出しで、大黒柱があつて、大きなお仏壇と仏間がある、そういう家です。その上、植木屋さんですから売りものの植木を置くための広いお庭があつて……。この家をグループホームにしようということになりました。檀家さんたちに相談したら、みなさん協力してくれると言ってくれる。テーマは「地域で支えられる里家」になりました。ほら、「里親」というのがありませんか。本当の親ではないけれど、迎えてくれる親、帰る場となってくれる親。それと同じように、本当に暮らした生まれた家、育った家ではないけれど、「帰るところとなる家」、そういうのにしよう。そう考えると、ウラの家がとてもしい家に思えてきました。

そんなわけで、寺檀制度をフル活用することで、私は認知症高齢者の方たちと関わることとなったのです。

### ■むつみ庵の立ち上げ

ここで、簡単にグループホームについて説明しますね。

大雑把に言いますと「同じ障害をもった人が集まって少人数（ユニットに9人まで）の共同生活をする」という形態の施設です。そして、スタッフはそのサポートやお世話をします。認知症高齢者だけではなく、知的障害者のグループホームも、精神障害者のグループホームも、身体障害者のグループホームもあります。

グループホームの良いことは、できる限り利用者の生活を奪わないことを主眼として点にあります。同じ障

害をもつもの同士が、できることは自分でやりながら、共同生活をする。それが「認知症高齢者として生きる」という側面を支えることとなります。私は、身体がお元気で認知症になった方にとっては、（現状では）グループホームが一番いい施設だと思います。事情によっては、在宅よりもいい場合があると思っております。というのは、認知症高齢者特有の問題ってのがあるんですよ。どうしても、目が離せない、外に出せない、包丁なんか持たせられない、つてなるでしょ。設備が整った大規模施設に入ると、バリアフリーだし、水道も勝手に止まるし、電気も勝手につく、徘徊センサーなんかもある。やはり、本人の生活能力がすぐに落ちてしまいますからね。やはり、認知症で身体が元気な人は、やっぱり者になりやすいと言うか、扱いにくいんです。だから生活単位が小さい方がいい。それに、認知症の人は、新しい情報に弱いので、できるだけ同じ顔ぶれと暮らす方がいいですね。

さて、私たちの古民家は「むつみ庵」と名づけられ、グループホームとして活用されるべく、開設に向けて動き始めました。

ところが……、なかなか認可がおりないのです。とにかく、申請のために府庁・市庁に足しげく通う毎日が続きました。こちらの考え方は理解してもらえても、実際に認可を取得するととなると簡単ではありません。超えねばならない、いくつものハードルが待ち受けていました。

とにかく、最初に大阪府の高齢者介護行政担当の方が（注：現在、グループホームは「地域密着型」のカテゴリ）となって、窓口は各市町村となっています。「えっ、ここでグループホームをやるの？ それは無理ですわ。あんだね、これを潰して新しい施設を建てなさい。そしたらかなりの補助金が出ますから」「いやいや、この家に住んで貰おうと思って始めた活動ですから、それじゃ何にもなりませんので」「そんなこと言っても、この家で認可を取ろうとしたら、かなりお金がかかるよ。この家ね、配線から全部やり直しだよ。非常口も取り付けて、ナースコールも付けて、お風呂も……」。もともとある家を使って施設にするのを古民家改修型って言うんですよ。そして、古民家

改修型には、なんと一銭の補助金も出ないのです。どう思います、みなさん。なんでこんな事になっているんですかねえ。今は、少し改善されましたけれども。

あの、私、実はこのスタイルに共感する人が出て、やがてあっちこちで同じような家ができるのではないかと期待していたんです。ところが、もはや単立のグループホームさえ数少なくなってしまうました。多くは、特別養護老人施設の併設や病院の併設です。単立のグループホームだと資金面や人材不足など、運営がたいへんですから。まして古民家改修型となれば、とてもめずらしくて。はからずも、むつみ庵は貴重な存在となってしまうました。それで、かなり遠くから見学者や研究者が来られます。むつみ庵で論文を書く研究者もいます。

話をもどします。とにかく認可を受けるために、とても苦労しました。例えば、「個室が確保されていないからダメですね」って言うんですよ。「えっ、ちゃんとひとりひとり個室になっていますけど……」「何を言っているんですか。この部屋、カギ、かからないじゃないですか」「カギがかからないとダメなんですか」「カギがかからないと、勝手に部屋を出て徘徊したらどうするんですか」とかね。

あの、うちね、部屋どころか玄関にもカギかかってないんですよ。お庭が広いんでね、徘徊し放題の家なんですね。疲れ果てて眠るまで徘徊できます。「ウチは徘徊自由の家にしようと思っっているんですけど……」「あんた、一体なに考えているんですか」と言われました。とにかく、何と言われても、カギがかからないと認可できません」と言うので、スタッフと一緒にホームセンターへ行っつて、単純なカギを買ってきて、取り付けました。「これでどうでしょうか」「これじゃダメですね」「えっ、どうして?」「このカギだと、中から開けることができるじゃないですか。勝手にカギを開けて徘徊したらどうするんですか」。

そこで、そのカギを外して、今度は外側に付け直して、「これでどうでしょうか」「しようがないですね」と、とりあえず、その項目にはチェックをもらえました。ところが、その後、一ヶ月も経たないうちに、今度は消防署からの

認可を受けるために現場のチェックを受けたところ、「ああ、このカギじゃ許可できません。中から開けられない。火事るとき、どうするんですか」と言われました。絶句です。

まあ、結局、フスマの引き戸をドアに換えたり、いろいろと工夫して、その件は解決しました。一事が万事、この調子で、とにかく認可までの道のりは遠かったのを思い出します。

そして、なんといっても、モメたのは「お仏壇を撤去しろ」という問題でした。宗教的なものは一切ダメ、というわけです。「居間もあるし、共有スペースもあるし、なぜ仏壇が必要なんですか。いらないでしょ」「いやいや、この空間、とてもいい雰囲気があると思いませんか」「そんな問題じゃないでしょ」などといったやりとりをしました。

私は、何も仏教を伝道するためとか、真宗を伝道するために、NPO活動や施設運営をしているわけではありません。むしろ、社会活動や社会サービスを伝道のツールの、使うのは間違っているんじゃないかと考えています。もちろん、私自身は、真宗者として、寺院の住職として何か出来ないかと思っ**て**関わっているんですけれども、相手がどんな信仰を持っておられようとそれは尊重する心づもりでしたから。実際に天理教の人もいてはりますし、創価学会の人もいてはりますし、真如苑の人もいてはります。

そのことを行政の方に伝えました。でも、どうしても認めてもらえません。そこで、えんえんとその人に講義することとなりました。「あのね、例えば、床の間がなくなつて生活できるじゃないですか。無い家は、いくらでもありますよね。でも床の間があれば、そこにはやつぱりお花を生けたり、お香をたいたり、掛け軸をかけた**り**したくなるでしょ。そこに荷物を積み上げるのはなんか気持ち悪いじゃないですか。お仏壇がなくても生活できますが、そこにお仏壇があれば、そ**っ**ちに足を向けて寝ころんだりするのは抵抗があるでしょ。こういった、『あつてもなくても暮らせるけど、あれば気になるもの』が、ある生活と無い生活は違**う**と思うのです。そして、それは認知症の方の生活にとつて、もしかしたら大きな意味をもっているんじゃないでしょうか」といった感じの話を1時間半ほど語りまし



て……。先方は、かなりウンザリしていましたね。

でも、人間の身体ってのは、そもそも不合理なものでしょ。理屈に合わないことだらけなんです。床の間やお仏壇やお仏間といった文化性が豊かなものは、必ず身体の知性の栄養になると思うのです。私、これを、メルロ＝ポンティを援用して、「身体知」と呼びまして、「このような空間が身体を賢くするんです」などと強弁しました。別に確信があつたわけじゃなかったのですが、もう意地になってしまつて……。今にして思えば、担当の人もいい人でした。「じゃあ、提出の図面には載せないでくださいよ」と、片目をつぶってくれました（みなさん、これ、ナイショですよ）。

でも、結果的には、むつみ庵にとつて、お仏壇やお仏間は、とても大切な「家の中軸」となりました。無理にでも主張してよかつたと思います。

#### ■ 認知症高齢者に学ぶ仏教

宗教だけがもつ特性のひとつに、「生き死にを越える物語を持つている」ということがあると思います。これは他のものに代替え出来ないでしょ。近代社会になるまで、宗教が果てしてきたサービスや提示してきた思想（癒しとか、教育とか、倫理とか、行政的な仕事とか、娯楽とか）などは、どんどんと他の領域に取って代わられるようになってきた。しかし、「生き死にを越える物語」は宗教だけが持つフィールドのひとつだと思つてます。

例えば浄土真宗であれば、「お念仏すれば、お浄土に往生できる」、「今生が終われば、お浄土へと帰る」、これは生死を超えた宗教的ナラティブ（語り続けられ、共有されてきた物語）です。そして、このような、帰るところのある人生を生き抜くことは、人間にとつて根源的な喜びではないかと思つてます。おそらく、何千年も何万年も変わらない部分じゃないでしょうか。死んだらそれまでと思つて生きている人生と、死んだら浄土に帰ると思つて生きている人生とは、

やはり違うでしょう。どちらが正しい、どちらが間違っている、というレベルの話ではなく、その人の存在そのものが変わるのだろうかと思います。

どのような生き方も、その人がその人の覚悟で選んだ道ですから、死んだら塵芥になるという覚悟で生きる人だって立派な道だと思っています。でも、私は帰るところのある人生の方が幸せだろうと思っています。だって、「おかえり」って迎えてもらえる世界がなければ、人生はあまりにもつらいじゃないですか。「おかえり」って言ってもらえるからこそ、苦悩の人生を這いずり回りながら、なんとか明日も生きていける、そんな気がします。ここに宗教の原風景があると思います。だから、むつみ庵を「帰るところ」にしたかったわけです。

しかし、結局、私自身がむつみ庵や認知症の方と関わることで、仏教を学ぶこととなりました。例えば、ある時、私、ふと「あれっ？ 認知症ってそんなに怖いもんじゃないなあ」って感じたんですよ。リアルに感じました。認知症って、漠然と、とても嫌なもの、苦しいもの、悲惨なものだと思っていたようです。ところが、認知症というものについてよく理解し、認知症の人と関わるうちに、「認知症の人は認知症の人として生き抜いていける、死に切ることもできるんじゃないか」、そう感じるようになりました。そうしたら、いつの間にか認知症との向き合い方が変わっていたんですね。そこでハタと膝を打ちまして、「そうか、これが『愚痴』か」と思っただけです。釈尊は、「ものごとの本質がわからないことで苦悩が生じる」という「愚痴」を、苦悩の大きな原因だと説いています。きちんとわからないから苦しいんですね。認知症の方と関わったおかげで、生きる上での苦しみをひとつ軽くさせていただきました。いや、これって、いつの間にか自分でもつてしまっていた枠組みを点検できた、ということなんじゃないかな。私たちは通常、自分の枠組みを通して他者と関係しようとしています。しかし、それでは別の枠組みに生きている他者と関係づけていくことが難しくなってしまう。まずは自分の枠組みを点検し、そしてできるだけその枠組みをはずして関係を築いていくこと。それが仏教の説くところです。

あるいは、これは介護理論の基本なんですけど、「認知症の人だからと、つい子供扱いしてしまったり、人前で恥をかかしたりすること」は、絶対ダメなんです。たとえ、もう自分の息子の名前も顔も忘れてしまっているほど認知症が進行している方でも、人前で恥をかいしたりしたら、後で必ず荒れると言いますか、通常とは違うような奇異な行動を起こしたり、心身の具合が悪くなる。介護理論では「だからこそ人間の尊厳は大事だ」と説くのですが、私はどうしても仏教の教えを通して見てしまいますから、「ああ、なんと人間の業とは深いものなのか」と感じてしまうのです。こんなに記憶能力や知覚能力や認識能力が崩れているのに、この身がある限り「自分」というものにすがり続ける……。そうしたら、親鸞聖人が「この身がある限り、この世にしがみつき、自分というものに執着し続ける」と悲嘆した深い苦悩を垣間見た思いでした。親鸞聖人の言葉って、なんだか、どん底の闇の中で光を放つようなところがありますね。

#### ■ いろんなモデルがある

本当は、あと、もうひとつ、別の事例をご紹介しますつもりでしたが、どうもその時間はなさそうです。

でも、よくまわりを見渡してみれば、日本仏教の花があちこちで咲いています。特に、今は、仏教が社会と関わっている新しい試みやモデルがどんどん出てきています。まあ、玉石混交といった状況ではありますが、それでも何か大きな変節期をむかえていることは間違いないさそうです。各地のさまざまな事例を上手く分類して提示することができれば、きっと仏教が現代社会や現代人に何らかの提案が出来るんじゃないか、またそれが求められているんじゃないか、そう思います。いろんなモデルを実際に見聞きすれば、「ああ、これなら私でもできるんじゃないか」とか、「これは自分に向いていないな」などと、何かヒントを得ることができるはずです。應典院と如来寺とは、特性も事情も手法も違うのと同じように、きっと各仏教者に合ったスタイルがあるに違いありません。できれば、フィール

ドワーク的に、さまざまな事例を見て回ってください。そのようなプロセスの中から、「いま、仏教ができること」の扉は開くのではないでしょうか。同時に、自分自身が仏教を学びなおすことができます。

ですから、今日は「仏教者もつと社会活動をしろ」という話をしたわけではありません。自分が立っているこの場の時間が、どれほど豊かな関係性に支えられているか、つながっているか、そんなところから始まるということがテーマです。さらには、目を凝らし、耳を澄ませて、さまざまな関係性を大切にしようとするだけで、現代において仏教ができることの可能性は拡大すると思います。

こういうのを私、勝手に「縁起の実践」と呼んでいます。縁起は「一切は関係性によって消滅変化している」という、この世界のメカニズムを理解する理念なのですが、少々大胆に、もつと積極的に解釈して語っています。これは『維摩経』で語られている「空の実践」をヒントにしました。「関わるけど、とらわれない」といった姿勢を、「縁起の実践・空の実践」などかなり恣意的で戦略的な言葉を使ったりもしております。

もう時間がきたようです。今日の私のお話はこのくらいにさせていただきます。

(二〇〇九年十二月一日 仏教学会公開講演)